

日本の音楽に対する大学生と60歳以上の人々の認識

石井由理・塩原麻里*

The Perception of Japanese Music by University Students and People over 60 Years of Age

ISHII Yuri, SHIOBARA Mari

(Received September 24, 2010)

はじめに

文化のグローバル化が進む中、外から入ってきた文化と従来からあるローカルな文化が接触した結果、それぞれの地域の文化にどのようなことが起きるのか。ローカルな文化が変容して一つの支配的な文化へ収斂していく側面や、独自のローカルな文化を維持しようとする動きが強まるという側面が指摘される一方、ハイブリッド化やクレオール化ということばで表される、双方の要素が混ざり合った新しい文化の誕生も一つの可能性として挙げられている (Robertson, 1992; Pieterse, 1995; Featherstone, 1997)。グローバル化における文化のハイブリッド化、クレオール化は一つの覇権への収斂に対抗して現れるものであり、その当然の結果として世界は無秩序になり (Pieterse, 1995)、アイデンティティーの分裂が起こる (Friedman, 1995) とも考えられている。しかしハイブリッド化、クレオール化とは文化がどのように混ざり合うことなのか、全て同じようなプロセスをたどって同じような結果となるのか、様々な段階やバリエーションがあるのか、など解明すべきことは多い。

ローランド・ロバートソン (Robertson, 1992) は、近代以降様々な文化を取り入れてきた日本の状況が文化のクレオール化を理解する上で示唆に富むとし、宗教を事例として考察している。著者も同様に考え、音楽文化に着目して、近代化以降西洋の音楽文化がどのように日本に取り入れられてきたか、現在の日本では音楽文化がどのような形で存在しているのかを、明治以降の学校教育政策や戦後の学習指導要領と教科書掲載曲の変遷の分析、音楽認識に関するいくつかの質問紙調査を通して考察してきた。その結果、近代学校教育が目指してきたのは、西洋音楽のもつ普遍性を共有しつつもオリジナルな文化としての価値をもち、品がよく親しみやすい音楽文化の創造であり、選択的に西洋の音楽文化を取り入れようとしてきたことが明らかとなった (石井, 2004; Ishii, Shiobara & Ishii, 2005)。質問紙調査では、そのような目的をもった教育を受けてきた結果としての人々の音楽認識の解明を試みてきたが、本稿では、これまで実施してきた日本の大学生および60歳以上の人々を対象とした5つの質問紙調査の総合的な分析を試みる。第一回目の調査から最後の調査にいたるまでに、いくつか修正した点があり、全ての調査を同等に比較することはできないため、比較可能な部分に限って論じていく。

1. 質問紙調査

質問紙調査の対象となったのは、東京近郊に住む60歳以上の回答者38名 (2009年実施)、山

* 国立音楽大学

口県近郊に住む60歳以上の回答者38名（2008年実施）、東京学芸大学の学生（2006年93名、2010年91名）、山口大学の学生（2006年から2008年にかけて実施、67名）である。回答者に関する情報として年齢、性別、特別な音楽体験の有無（有の場合具体的に記述）、東京60歳以上と東京学芸大学2010年の回答者には自分の故郷を記入してもらった。山口大学の調査では個々の質問紙と回答者を一致させることはできないが、回答者全員の出身県は明らかになっている。

質問紙調査の内容は戦後の学習指導要領に用いられた用語の分析から抽出した「日本の音楽」「我が国の音楽」「郷土の音楽」(Ishii&Shiobara, 2007)に「好きな音楽・よく聴く音楽」を加えて、思い浮かぶ曲を10曲まで列記するものである。2006年実施の東京学芸大学における調査では時間の都合上「郷土の音楽」は5曲までの回答としたが、10曲以内とした他の調査の回答でもほとんどが5曲以内の記述だったので、影響はないものとして分析の対象とした。「好きな音楽・よく聴く音楽」についても2006年の東京学芸大学の調査では尋ね方が異なったため、これは分析対象外とした。

回答に関しては、曲目を尋ねたにもかかわらず、特に60歳以上の調査において歌手名や演歌などのジャンル名を答える場合がみられたため、全ての調査に関して歌手名、ジャンル名、音楽ジャンルのわかる楽器名をそれぞれ1曲として数えることとした。こうして得られた回答を、近代化以前の音楽形式の曲、西洋音楽形式の曲、外国曲に大別し、さらに西洋音楽形式の曲を機能に基づいて分け、次に示す計9つのカテゴリーに分類した。

- 1 近代化以前の音楽スタイルをもつ日本の曲（以下「伝統」）
- 2 唱歌、童謡等の西洋音楽理論に基づく主として教育目的の日本人作曲家の作品(以下「唱歌」)
- 3 歌謡曲、J-pops、演歌等の大衆音楽（以下「歌謡曲」）
- 4 外国曲
- 5 映画、テレビ、ラジオのテーマ曲や番組内で流れた曲（以下「TV・映画」）
- 6 軍歌
- 7 自治体、地元スポーツチーム、地元企業のテーマ曲（以下「自治体」）
- 8 校歌
- 9 不明

しかし、近代化以前からある民謡と近代化以降に作曲された新民謡、近年町おこしのために作られた「～音頭」をどのように区別するかが困難であったため、全てを近代化以前の音楽形式として数えた場合と、近年町おこしのために作られた地元の音頭を「自治体」に分類した場合の両方の分析を行った。このほかにも二つ以上のカテゴリーのどちらに入るのか判断が難しい場合があり、分類に著者の主観が入ったことは否めない。より正確に分類するには各曲の音楽的な分析が必要であり、この点は課題として残ったが、分析結果は全ての調査を同じ主観に基づいて分類した結果であるので、比較考察をする意味はあるものと考えられる。

2. 分析結果

2-1. 「日本の音楽」に対する回答

「日本の音楽」に対して回答された曲の延べ数は表1のようになった。これらを図に示したものが図1～図5である。東京学芸大学の2010年の調査結果が他とやや異なり「伝統」が多くなっているが、「日本の音楽」に対する各カテゴリーの比率は5者とも比較的似ている。しかし、それぞれのカテゴリーに対する回答の内訳を見ると違いもあることがわかる。まず「伝統」カ

テグリーであるが、いずれの調査でも「さくらさくら」「君が代」の2曲に回答が偏る傾向があることは共通している。しかしその偏り方を「伝統」カテゴリーに占める割合として示すと次のようになり、60歳以上の回答者と大学生の間に大きな開きがあることがわかる。

東京60歳以上 36回答中「さくらさくら」9=25%、「君が代」4=11% (合計36%)
 山口60歳以上 59回答中「さくらさくら」17=29%、「君が代」5=8% (合計37%)
 東京学芸大学2010 119回答中「さくらさくら」68=57%、「君が代」38=32% (合計89%)
 東京学芸大学2006 118回答中「さくらさくら」50=42%、「君が代」43=36% (合計78%)
 山口大学 97回答中「さくらさくら」38=39%、「君が代」27=28% (合計67%)

つまり、「伝統」カテゴリーが全体に占める比率が似ているといっても、大学生の場合はほとんどがこの2曲によるものであり、「伝統」カテゴリーのサンプルのようなこの2曲を除くと曲目のバリエーションは乏しい。東京学芸大2010年の結果が他の大学生の結果とやや異なって「伝統」が多かったのも、実は全カテゴリーを含んだ延べ回答数におけるこの2曲への回答の偏りが非常に大きく、他のカテゴリーの回答数が少なかったためである。

表 1

	東京60歳以上	山口60歳以上	東京学芸大学 2010	東京学芸大学 2006	山口大学 (2006-2008)
伝 統	36	59 (55)*	119	118	97
唱 歌	125	107	202	340	143
歌 謡 曲	49	35	22	106	72
外 国 曲	4	7	8	51	16
T V ・ 映 画	4	3	5	25	17
軍 歌	2	2	0	3	0
自 治 体	0	0 (4)	0	3	1
校 歌	9	0	0	0	0
不 明	0	4	1	11	3
合 計	229	217	357	657	349

* () 内の数字は新しい「～音頭」を「自治体」のカテゴリーで数えた場合。

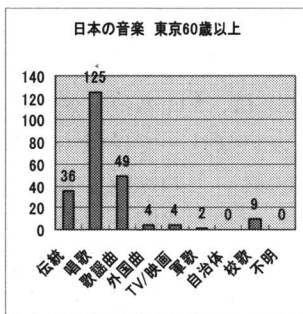


図 1

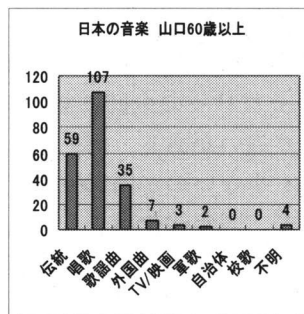


図 2

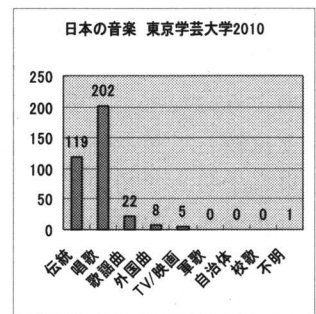


図 3

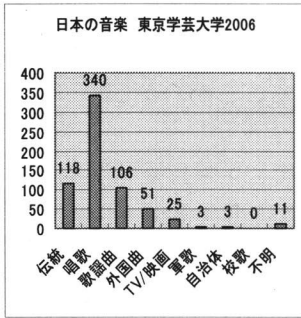


図4

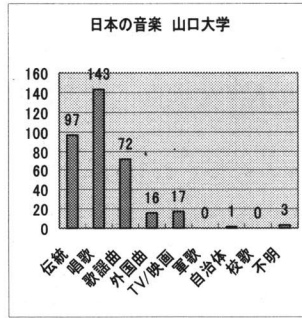


図5

一方、このカテゴリーに含まれる民謡（近年の町おこし用の曲は除いた）やわらべ歌の延べ数は東京60歳以上14曲、山口60歳以上26曲、東京学芸大学2010年5曲、同2006年10曲、山口大学16曲であり、回答者数の違いも考慮に入れると60歳以上の方がはるかに多く、地域で比較すれば山口的回答数の方が多い。

どの回答者グループにおいても最も回答数が多かったのが「唱歌」カテゴリーで、回答数全体に占める割合は東京60歳以上では54%、山口60歳以上では50%、東京学芸大学2010年では58%、同2006年では52%、山口大学では40%である。「唱歌」の中の具体的な曲名、偏り方もよく似ているが、どちらの世代とも東京グループの方が「唱歌」カテゴリーの曲が多い傾向がある。最もこのカテゴリーの回答が少ない山口大学では、その分、学芸大学の2グループと比べて「歌謡曲」が21%と多めである。東京学芸大学2010年の「歌謡曲」カテゴリーの曲数は6%、同2006年は16%であるが、中身を見ると、東京学芸大学2010年では「上を向いて歩こう」「翼をください」という何十年にもわたって教科書に掲載されてきた曲がこのカテゴリーの延べ回答数22の中のそれぞれ2、同大学2006年では延べ回答数106のうち「翼をください」が9、「上を向いて歩こう」が8であり、「歌謡曲」カテゴリーとはいえかなり「唱歌」カテゴリーの曲に近い存在の曲を回答している。これに対し、山口大学では72回答中「上を向いて歩こう」4、「翼をください」0である。近年教科書に掲載されるようになった「川の流れのように」も大学生グループの回答では東京学芸大学2010年で2、同2006年で6、山口大学で6と、「日本の音楽」を代表する「歌謡曲」カテゴリーの曲のサンプルになりつつある。60歳以上のグループではこの曲の回答は東京で2、山口で1であり、他の曲と比べて特に目だって回答が偏っているわけではない。

2-2. 「我が国の音楽」に対する回答

「我が国の音楽」に対する延べ回答数の一覧は表2、それぞれをグラフに表したものは図6～10のようになった。それぞれのカテゴリーの全回答数に対する比率は、「日本の音楽」への回答と比較してグループごとにかなり違いがある。例えば「伝統」カテゴリーでは最も割合の多い東京学芸大学2010年が65%、最も少ないのが同2006年で31%、60歳同士の比較でも東京60歳以上が38%、山口60歳以上が55%で、同年代や調査した場所が同じグループ同士でも差が出た。原因は60歳以上2グループでは東京グループが唱歌を答える傾向、山口グループが民謡を答える傾向が強かったこと、大学生3グループでは「さくらさくら」「君が代」以外の回答の数に違いがあったことが大きい。

一方、「日本の音楽」の結果と比べてすべてのグループで「伝統」カテゴリーの回答の比率が高くなっていることは共通しており、その主な理由として「唱歌」カテゴリーの回答数が減少したことが挙げられる。「日本の音楽」と同様に「君が代」と「さくらさくら」に回答は偏っており、大学生の方が偏りが大きいのも同じであるが、「我が国の音楽」においては「君が代」の回答の方が「さくらさくら」を上回る。

東京60歳以上	48回答中「さくらさくら」7=15%、「君が代」10=21%（合計36%）
山口60歳以上	67回答中「さくらさくら」4=6%、「君が代」21=31%（合計37%）
東京学芸大学2010	115回答中「さくらさくら」28=24%、「君が代」76=66%（合計90%）
東京学芸大学2006	159回答中「さくらさくら」40=25%、「君が代」72=45%（合計70%）
山口大学	102回答中「さくらさくら」34=33%、「君が代」54=53%（合計86%）

「歌謡曲」「外国曲」「TV・映画」「自治体」カテゴリーの回答も東京60歳以上の「外国曲」が4から8に増えたことと「自治体」カテゴリーの東京学芸大学2006年が3から9に増えたことを除けば減少か横ばいで、増えたのは60歳以上2グループと東京学芸大学2006年の「軍歌」の回答である。しかし増加したとはいえ「軍歌」の回答数は「唱歌」や「歌謡曲」の回答数よりもずっと少なく、国歌「君が代」を別格とすればカテゴリー的には「我が国の音楽」は60歳以上にとっては「さくらさくら」と民謡と唱歌、大学生にとっては「さくらさくら」と唱歌のイメージに結びつくようである。この傾向が最も顕著だったのが東京学芸大学2010年で、「さくらさくら」「君が代」に「唱歌」カテゴリーの回答を加えた数が全回答数の80%を超える。

表2

	東京60歳以上	山口60歳以上	東京学芸大学 2010	東京学芸大学 2006	山口大学 (2006-2008)
伝 統	48	67	115	159	102
唱 歌	49	24	52	203	78
歌 謡 曲	13	16	3	78	18
外 国 曲	8	3	4	25	5
TV・映 画	2	0	1	24	5
軍 歌	5	9	0	6	0
自 治 体	0	0	0	9	1
校 歌	1	0	0	2	0
不 明	0	1	0	9	1
合 計	126	120	175	515	210

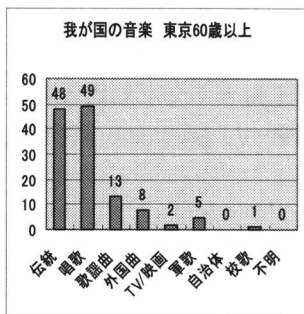


図6

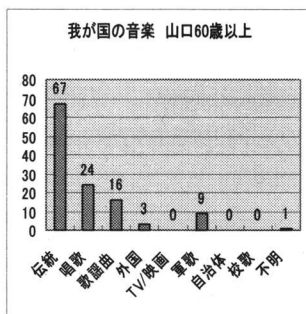


図7

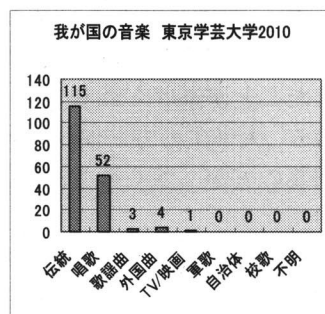


図8

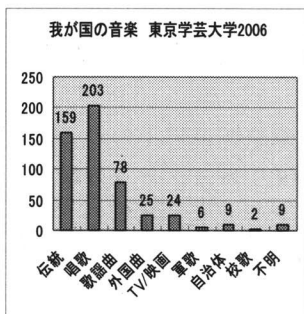


図9

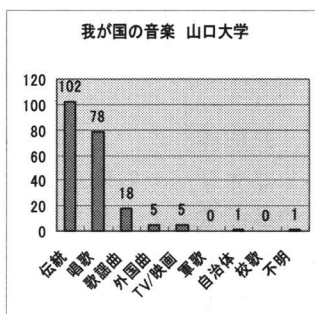


図10

2-4. 「郷土の音楽」に対する回答

表3は「郷土の音楽」に対する延べ回答数の一覧である。東京60歳以上では新しい「～音頭」の回答はなく、東京学芸大学2010年でもそのような回答は1曲のみだったのでこれら2グループは除き、他の3グループに関しては、この種の曲を「伝統」カテゴリーで数えた場合と「自治体」カテゴリーで数えた場合の両方のグラフを作成し、それぞれ①、②とした。図11～18に示したのがそれらのグラフである。

それぞれのカテゴリーの割合に関していえば、まず60歳以上と大学生の間に大きな違いがある。新しく作られた「～音頭」を「自治体」に分類した結果で比較すると、60歳以上では「伝統」カテゴリーが半数以上を占めるのに、大学生では3分の1程度にとどまる。大学生ではその分「唱歌」カテゴリーの回答が多くなっており、その傾向は特に東京学芸大学2010年の回答で顕著である。「歌謡曲」カテゴリーの回答は山口60歳以上には全くないが、東京60歳以上では20%、大学生3グループでは10%前後となっている。さらに「自治体」カテゴリーを見ると、山口60歳以上の割合が際立って多く40%、次いで東京学芸大学2006年の21%、山口大学の17%である。東京60歳以上、東京学芸大学2010年では10%を切っている。

「伝統」カテゴリーの回答を見ると、学生3グループの回答が偏っているのは「ソーラン節」で、東京学芸大学2010年では11人25%、同2006年では28人28%、山口大学では8人12%であった。他に多かった回答は、山口大学の「炭鉱節」と「花笠音頭」が各9%、東京学芸大学2006年の「東京音頭」16%である。山口大学の回答者76人中、北海道出身は1人、山形県出身は0人であり、東京学芸大学2010年の回答者中、北海道出身は2人である。同大学の2006年の回答者の出身県は確定できないが、2010年の回答者から推察すると93人中28人が北海道出身という可能性はないに等しい。同様の傾向は60歳以上でもわずかではあるが見られ、山口の調査での「ソーラン節」の回答が3人、東京で5人である。山口の回答者が北海道出身かどうかは可能

性が低いとしかいえないが、東京の回答者には北海道出身者は1人しかいない。このことから、「ソーラン節」は本人の故郷がどこであるかにかかわらず連想される、「郷土の音楽」を代表する曲であることがわかる。「五木の子守歌」にもややこの傾向が見られた。

学生が自分の故郷とは関係のない曲を回答する傾向は他のカテゴリーにも見られ、例えば「唱歌」の回答では3グループとも故郷の一般的イメージを歌った「ふるさと」が圧倒的に多く、「唱歌」の回答数のうち東京学芸大学2010年は50%、同2006年は26%、山口大学は39%が「ふるさと」である。他には「赤とんぼ」(山口、東京学芸大学2006年)、「茶摘み」(東京学芸大学2010年。「茶摘み」と答えた学生10人のうち、茶の産地である県の出身者は3人)が多い。「歌謡曲」カテゴリーで回答が偏ったのは「島歌」で、東京学芸大学2010年が3人、東京学芸大学2006年が12人、山口大学が4人である。山口大学の4人のうち2人は沖縄出身であるが東京学芸大学の2010年の回答者の中には沖縄出身者はなく、2006年の回答者にも12人も沖縄出身者が含まれる可能性は極めて低い。ちなみに東京学芸大学2010年では沖縄出身者がいないにも関わらず回答には「島人ぬ宝」(回答者は群馬県出身)「チャンプルーズ」(回答者は岡山県出身)「涙そうそう」(回答者は群馬県出身)が含まれている。他の回答曲には回答者自身の出身地に関係のあるものが多く含まれており、自分自身の故郷に関連する「郷土の音楽」と日本を代表する「郷土の音楽」の両方を回答した形となっている。大学生3グループが答えた「自治体」カテゴリーの曲は、だいたい自分の故郷と関係の深い曲であるが、どんな関係かは様々で、新しい自治体音頭のほかに地元スポーツチームの応援歌や地元企業のCMソングなどが入るのが特徴である。また、自分の母校の校歌を「郷土の音楽」として答えるのも大学生グループの特徴である。

大学生3グループと異なり、60歳以上の2グループはすべてのカテゴリーで自分の故郷に関係ある曲を答える傾向がある。山口60歳以上で多かった「伝統」カテゴリーの回答は「鯨歌」11人22%、続いて「男なら」6人13%、「自治体」カテゴリーでは「油谷音頭」15人30%、「油谷町民歌」7人14%、「山口県民歌」6人12%、「長州音頭」5人10%である。一方東京60歳以上では「東京音頭」7人10%が多かったほか、「お江戸日本橋」「江戸子守歌」「江戸木遣り」などの東京の曲、千葉民謡の「大漁節」、宮城民謡の「斎太郎節」など、回答者の出身地の曲が1-2人単位で回答されている。「歌謡曲」カテゴリーは山口では回答がなかったが、東京の回答には「銀座カンカン娘」「東京だよ、おっ母さん」「矢切の渡し」「有楽町で逢いましょう」などの東京の歌のほか、回答者の故郷を歌った水森かおりの歌や八代亜紀の歌などが含まれる。これらのことから、60歳以上の2グループでカテゴリーの割合が大きく異なったのは、自分の故郷を歌った曲がどのカテゴリーに属するかによるところが大きいのと同時に、地方から東京に何十年も前に移り住んだ回答者が、その後作られた自分の故郷の自治体音頭等を知らない、あるいは愛着を感じないせいもあるようである。大学生と異なり、地元スポーツチームや企業の歌は回答にはなく、自分の母校の校歌を回答したのも1人(2曲)のみであった。これらの音楽は60歳以上の回答者には自分の「郷土の音楽」とは認識されていないようである。

表3

	東京60歳以上	山口60歳以上	東京学芸大学 2010	東京学芸大学 2006	山口大学 (2006-2008)
伝 統	72	70(48)*	41(40)	116(99)	80(68)
唱 歌	14	3	59	62	46
歌 謡 曲	24	0	10	28	25
外 国 曲	1	0	2	1	4
TV・映画	4	0	0	4	1
軍 歌	0	0	0	0	0
自 治 体	7	16(38)	10(11)	43(60)	20(32)
校 歌	0	2	4	22	11
不 明	1	3	6	10	3
合 計	123	94	132	286	190

* () 内の数字は新しい「～音頭」を「自治体」のカテゴリーで数えた場合。

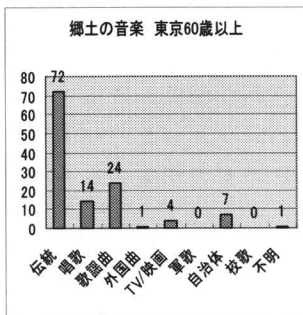


図11

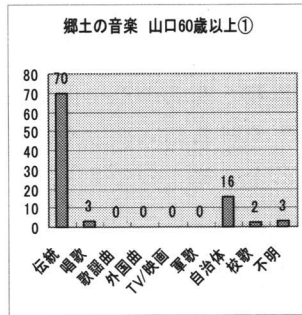


図12

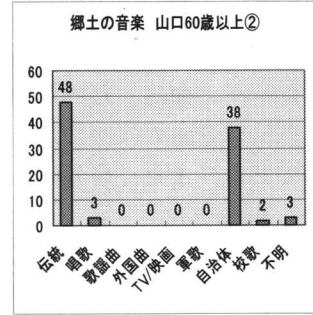


図13

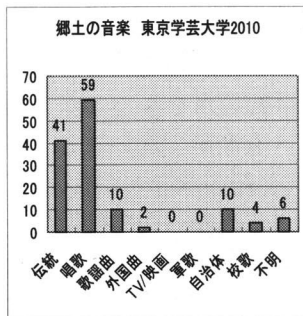


図14

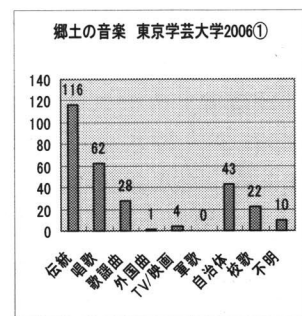


図15

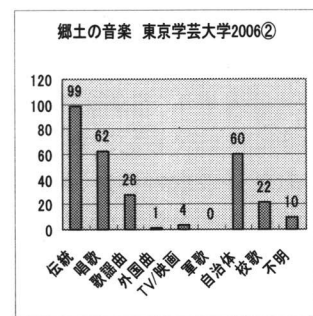


図13

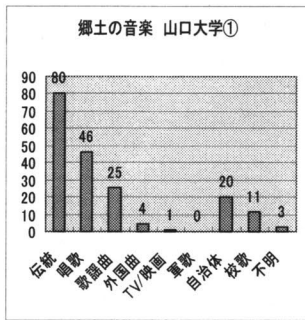


図17

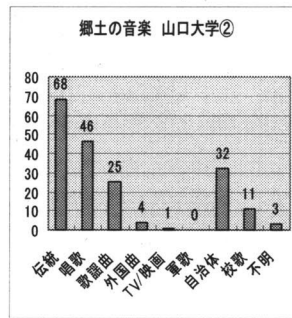


図18

2-5. 「好きな音楽・よく聴く音楽」に対する回答

前述のようにこの質問に関しては東京学芸大学2006年の回答を除いている。他の4グループの回答を表4、および図19～22に示した。いずれのグループの回答でも「伝統」カテゴリーの曲は少ない、あるいはない。「唱歌」カテゴリーの回答も少ない。60歳以上の2グループでは「伝統」と「唱歌」を合わせるといずれも16%であるが、内訳は山口で「伝統」10%、「唱歌」6%なのに対し東京でそれぞれ2%、14%となっており、他の3つの質問に対する回答に見られた、東京の回答者の方が「唱歌」を答える傾向が強いことがここでも見られる。東京60歳以上(36%)を除いては最も回答の割合が多いカテゴリーは「歌謡曲」で、山口60歳以上59%、東京学芸大学2010年61%、山口大学84%である。東京60歳以上で最も割合が多いカテゴリーは「外国曲」で43%。その他のグループでは「外国曲」は2番目に多いカテゴリーで、山口60歳以上21%、東京学芸大学2010年27%、山口大学14%である。

表4

	東京60歳以上	山口60歳以上	東京学芸大学 2010	山口大学 (2006-2008)
伝 統	5	12	0	0
唱 歌	31	7	17	5
歌 謡 曲	81	75	145	279
外 国 曲	95(57)*	26(20)	65(24)	48(8)
TV・映 画	0	1	6	0
軍 歌		1	0	0
自 治 体	1	0	2	0
校 歌		0	0	0
不 明		3	3	4
合 計	225	125	238	336

* () 内は欧米クラシック

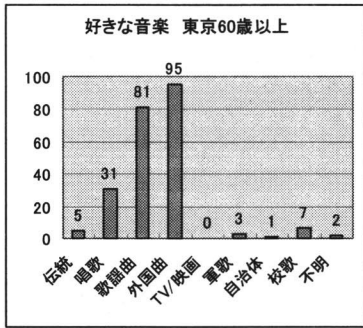


図19

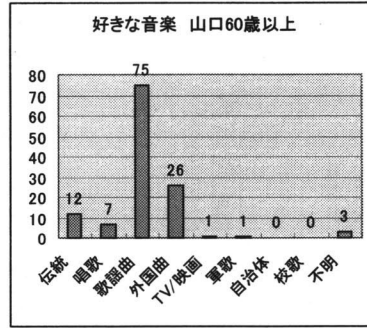


図20

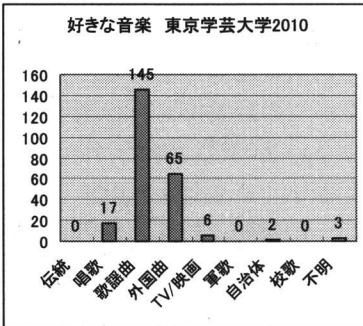


図21

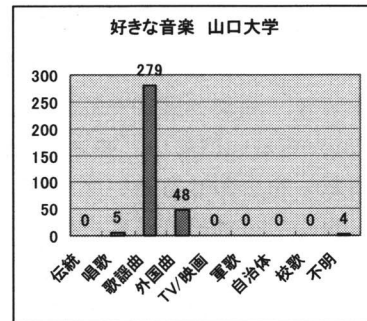


図22

「歌謡曲」の内訳を見れば、山口60歳以上は演歌、東京60歳以上は歌謡曲、大学生はJ-ポップスが主流である。「外国曲」の内容は東京60歳以上で60%、山口60歳以上で80%、東京学芸大学2010年で37%、山口大学で15%が欧米クラシックを答えており、60歳以上の回答者のクラシック好きが顕著である。他の外国曲は60歳以上ではロック、ポップス、ジャズ、シャンソン、ハワイアン、大学生の回答はロック、ポップス、R&Bなど様々である。

3. まとめ

以上述べてきたように、回答された曲は様々な理由で選ばれており、全回答数に対するあるカテゴリーの占める割合が大きいからといって、単純にそのカテゴリーの音楽が回答者たちの音楽文化として存在しているとは限らない。「日本の音楽」や「我が国の音楽」に見られたように、これが日本の国の歌ですよ、と学校で習った特定の曲に回答が偏ることによって、その曲の属するカテゴリーの回答数が増える場合があるからである。また、「郷土の音楽」の回答に見られたように、自分の故郷を歌った曲がどのカテゴリーにあるかによってカテゴリー別割合は変わるからである。さらに東京学芸大学の例のように、同じ大学で同じ教員の授業の受講生を相手に行った調査の結果が年度によって大きく異なる場合もあり、よく似た条件の集団であっても、個人個人の趣味の違いによって結果が変わってくることも考慮しなくてはならない。このように調査結果を一般化するには慎重でなければならないが、それでも5つの調査に一貫して現れたいくつかの特徴を挙げることは可能である。

まず、「日本の音楽」「我が国の音楽」における「さくらさくら」と「君が代」の回答の世代間の差である。どちらの質問においても、60歳以上の回答ではこの2曲以外の「伝統」カテゴ

リーの曲が3分の2程度を占め、しかも曲名が多様であるということは、音楽の特質としてこのカテゴリーの音楽が「日本の音楽」あるいは「我が国の音楽」であるという認識があるものと考えられる。対するに大学生を対象とした結果では、むしろ「日本の音楽」「我が国の音楽」といえばこの2曲であり、この2曲が属するのが「伝統」カテゴリーであったと解釈すべきであろう。いわば知識として学んだ「日本の音楽」であり「我が国の音楽」である。

「唱歌」カテゴリーについてはどちらの世代でも特定の曲以外に多くの曲名があがっており、世代を超えて「日本の音楽」「我が国の音楽」として共有されている音楽文化は、主として「唱歌」カテゴリーの音楽であるといえる。「日本の音楽」に関してはこれに加えてやはり多くの曲名があがった「歌謡曲」カテゴリーの音楽が、「伝統」カテゴリーの特定の曲への偏りを差し引けば、「日本の音楽」を構成する2番目の要素として認識されていると考えられる。しかしこのカテゴリーの音楽を「我が国の音楽」としても認識しているかということその度合いは低い。60歳以上の世代では「日本の音楽」としては「唱歌」カテゴリーに次いで「伝統」カテゴリーと同程度の位置づけで「歌謡曲」カテゴリーの音楽、「我が国の音楽」としては「唱歌」カテゴリーと同程度に「伝統」カテゴリーの音楽を構成要素としてとらえている。

次に「郷土の音楽」に対して自分の故郷と関係の深い曲を答えるか否かで、二つの世代は大きく異なった。60歳以上では「郷土の音楽」の代表としての「ソーラン節」を除いては、どのカテゴリーにおいても自分自身の故郷に何らかの関連のある曲を回答したが、大学生ではそのような曲以上に自分の故郷とは関係のない他の地域の有名な民謡やわらべ歌、抽象的に故郷のイメージを歌った唱歌や歌謡曲などの回答が目立った。回答者の故郷に関連のある回答も、昔からの民謡は次第に新しい自治体の音頭や地元チーム、企業のテーマ曲に取って代わられつつある。

最後に、回答者たちが日ごろ親しんでいる音楽は「歌謡曲」と「外国曲」カテゴリーの音楽がほとんどであり、さらに大学生では「外国曲」の内容も大衆音楽の方が多いたことが明らかになった。日本のものであれ外国のものであれ、大衆音楽は学校の音楽教育がこれまでどちらかといえば避けてきたタイプの音楽である。つまり国の政策の意図に反して人々の日常生活の中にある音楽文化の主流は大衆音楽であり、それにもかかわらず人々は日本や、我が国や、郷土の音楽は何かと問われた時には国の政策が意図してきたような唱歌や伝統的な曲を答えるのである。一人の人間の中に個人としての自分、日本人としての自分、国歌の一員としての自分、地域の一員としての自分が並存しており、それぞれに異なる音楽的アイデンティティーをもっているわけである。

日本の音楽文化の中で進んでいるクレオール化とはどのようなことかという問いに立ち帰れば、今回の調査の結果が示している可能性は、人々のもつ音楽的アイデンティティーの多層性とそれらの場に応じた使い分けであり、その層の成し方は世代によって変化をしているということである。近代化以前の音楽、西洋音楽、西洋音楽形式を取り入れた日本製の音楽のいずれもが人々のもつ音楽文化の中に存在しているが、「伝統」カテゴリーの音楽はサンプルとして残された曲以外は衰退しつつあり、民謡は地域集団共通のアイデンティティーとしては機能しなくなってきている。また、今回の分析では焦点を当てなかったが、同じカテゴリーの曲であっても個々の曲がよりグローバルな普遍性をもつものへと変化をしてくれていることも予想され、音楽文化のクレオール化とは多様な音楽が層を成して並存するだけでなく、層の構成要素の質自体の変化をも含んだ現象であるという可能性が考えられる。

参考文献

- Featherstone, M. (1997) *Undoing Culture Globalisation : postmodernism and identity*, London : Sage.
- Friedman, J. (1994) : *Cultural Identity and Global Process*, London : Sage.
- 石井由理 (2004) 「公式の知識としての音楽」：『山口大学教育学部研究論叢』54 (3), 101 - 110
- Ishii, Y. & Shiobara, M. (2007) “A quest of Japanese-ness in Japanese music curriculum” : 山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究』1, 28 - 36
- Ishii, Y., Shiobara, M. & Ishii, H. (2005) “Globalisation and national identity: a reflection on the Japanese music curriculum” *Globalisation : Societies and Education* vol. 3, no. 1, pp. 67-82
- Pieterse, J.N. (1995) “Globalization as hybridization” in Featherstone : M. (ed.) *Global Modernities*, London:Sage, pp. 45-67.
- Robertson, R. (1992) *Globalisation : Social theory and global culture*, London:Sage.